

日ごろは、教育、とりわけ全国学力テストに関し、様々な記事を提供していただきありがとうございます。

私たち愛知県教職員労働組合（略称・愛教労）は、毎年、テストを受けた子どもや担任の感想を聞いたり、テスト問題や解説資料などを分析して、学習したりしています。その結果、全国学力テストは、競争をあおり、子どもの心を傷つけ、学校教育を歪めるものであることが明らかとなっています。

来月末には、文科省から今年度の全国学力テストの結果が公表される予定です。数値のみが一人歩きして、競争に拍車がかかるのではないかと懸念されます。以下、今年度の全国学力テストについて、いくつかの問題点を紹介します。

### ① 中学校英語調査で現場は大混乱

英語調査の中でも特に「話すこと」調査をめぐって、現場は大混乱に陥りました。たとえば、学校にあるコンピュータが対応しないということで、小学校から借りてきて全職員で試すということが行われたところもありました。コンピュータの設定のために、調査当日も含めて、担当者が授業をせずにかかり切りとなったところもありました。そもそも、新年度当初の大切な時期に全国学力テストを実施すること自体が間違っていますが、とりわけ「話すこと」調査により、学校現場に負担がかかりました。

大変な苦勞をしたにも関わらず、実際に調査を行ってみれば、生徒同士の席が近いためお互いの声が聞こえてしまうという状況も見られました。解答の公平性が保てず、「話すこと」の「学力」は把握できません。

### ② 「知識・技能」の把握ができない

今年度から、国語・算数（数学）については、A問題（知識・技能）とB問題（活用）が一体化されました。これまでも、とくに小学校調査では、A問題の時間がB問題の半分であり軽視されていました。それがこの一体化により、A問題がB問題に飲み込まれてしまい、まるでB問題へと一本化したような内容へと切り替わりました。

その結果、まともに「知識・技能」の「学力」を把握することができなくなりました。義務教育において育まれるべき学力の中で、その基盤となる「知識・技能」が身につけているかどうかを把握できなくては学力調査の意味はありません。

### ③ 「活用」の把握もできない

では、「活用」の把握はできるのでしょうか。残念ながら、こちらもできません。

全国学力テストは、日頃学校で行っているテストとは、内容も形式も全く異なっています。小学校国語を例にとってみると、次のように難解なものとなっています。

- ・ 初めて目にする長文の問題文を読み解くだけでなく、メモ・表・グラフなどの資料と関連させて読み取らなければならない。
- ・ 設問文から出題者の意図を読み取らなければならない。そして、問題冊子をめくって前のページにさかのぼって問題本文の該当箇所を見つけなければならない。
- ・ 自分の考えではなく、問題ごとに設定されている架空の6年生「○○さん」の考えをもとに解答しなければならない。
- ・ （毎年必ず3問ありますが）記述式解答の問題については、字数制限などの条件に合

わせて文章化して解答しなければならない。

- ・ 別の解答用紙に解答を記入しなければならない。
- ・ これらを、できるだけ早く行わないと、時間内に解答することができない。

このような特徴を持つ全国学力テストですが、実はこの特徴はここ数年間全くといっていいほど変化がありません。その結果、事前に過去の問題や予想問題などをやればやるほど点数が上がります。逆に、事前対策をしなければ、点数は低く出るのです。全国学力テストではまともに「活用」の「学力」を把握することはできず、事前対策をしたかどうかを示す結果が出るだけなのです。学力調査としての意味がないだけでなく、競争や序列化に拍車をかけるものとなってしまっています。

貴社におかれましては、文科省の公表する結果のみだけではなく、全国学力テストの問題点についても広く知らせていただければ幸いです。

なお、全国学力テストの抜本的見直しを求める世論が広がってきています。福井県議会意見書や青森県いじめ報告書を同封しますので、取材や記事で参考にしていただけたらと思います。

よろしく申し上げます。

2019年6月吉日

〒460-0011

名古屋市中区大須4丁目14-57

愛知県教職員労働組合協議会

幹事（「学力テスト」問題担当） 坂井辰巳

TEL 052-242-4474

FAX 052-242-2938